

あなたがたに平和があるように

加藤俊英

奨励者紹介[かとう・としひで]

日本キリスト教団兵庫教区主事

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

(ヨハネによる福音書 20 章 19—21 節)

私たちの「恐れ」

本日はお招きいただきまして、この水曜チャペル・アワーの時をみなさんと持てますことを感謝いたします。今日、みなさんにどのようなお話をさせていただこうかと考えております時に、今学期の統一テーマが今日のプログラムにも掲載されておりますように、マタイによる福音書 14 章 27 節の言葉であるとお知らせいただきました。この言葉は恐れを抱いていた弟子たちに対してイエスが「恐れることはない。」と語りかけた言葉でありますけれども、では、今を生きる私たちはどのような恐れを抱きながら歩んでおり、現代を生きる私たちにどのようなメッセージを聖書は与えるのかと思うわけです。

「恐れ」ということを考える時に、みなさんは自分自身のこととしてどのようなことに思いが至るでしょうか。

世界規模の話で言うと、それこそ、連日、マスメディアによって報道されているように、ウクライナの状況を見るにつけ、そもそも 21 世紀の世界でこのような戦争状態が引き起こされるという驚きとともに、この戦争はどのようなことになっていくのか、私たちの世界の状況が悪化していくのではないかという「恐れ」を抱くことだろうと思います。私は国際政治学が専門ではありませんので、政治状況の分析をするようなことは避けませんが、牧師の立場から言わせていただくと、人間が文明を持って以来、人間が共に生きる中で基本中の基本として聖書の教えでもそうでありますし、ほとんどの伝統宗教が教えてきて何千年、何万年も言われてきた「殺すなかれ」という戒めが未だに守ることが出来ない人間の愚かさ、罪深さといったものを目の当たりにする思いがします。

世界規模のそのような恐れもありつつ、それぞれの日常生活の中で恐れということになると、将来に対する不安とか心配事というレベルでいうと本当にたくさんあると思います。必ずしも日常的に不安や心配事があるというのはリスク管理という意味で悪い事ばかりではないと思いますが、本人にとって深刻な恐れや苦悩が人には伝わらなかつたりもするということが往々にしてあるものかもしれません。

弟子たちの「恐れ」

今日みなさんとお読みしましたヨハネによる福音書 20 章 19 節以下の箇所においても弟子たちが

恐れを抱いている様子が記されています。19節「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」。弟子たちは家の中に閉じこもるほどの、震えるほどの恐れを持っていたことが記されています。

「ユダヤ人を恐れて」という言葉は直接的には、弟子たちがユダヤ教の大祭司や最高法院を恐れていたことを示しています。イエスが逮捕される際にイエスを見捨てて逃げ出してしまった弟子たちは、イエスが十字架にかけられて殺されるという状況の中で、自分たちもユダヤ人に逮捕される恐れがあり、逮捕されればイエスと同じように十字架につけられるであろうということを予測し、自分たちの命の危機を感じ、恐れて隠れていたのでしょう。

さらに、24節以下のトマスについても考慮に入れて考えてみると、物語の中においては、マリアに告げられて、弟子たちはイエスが復活したことを知っていることになっています。そのことを考えると、弟子たち、とくにトマスは復活のイエスに会うことを恐れていたのかもしれませんが。弟子たちの心の中には、かつて自分たちが主としてしていたイエスを裏切り、見捨てて、見殺しにしてしまったという事実が重くのしかかっていたことでしょう。自分たちがイエスに対して取ってしまった忘れることのできない行動に当然、罪悪感を持っていたことでしょう。そんな自分たちがイエスに合わせる顔がないという思いがあったでしょうし、イエスが現れれば、自分たちの裏切りが指摘されて、イエスを見捨てて、裏切った自分たちの罪が裁かれると恐れを持っていたのかもしれませんが。つまり、弟子たちは、ユダヤ人たちに命を狙われているという外面的な恐れと、自分たちがイエスに対してしてしまったことという罪悪感から来る内面的な恐れという二つの意味での恐れを持っていたのではないのでしょうか。

トマスの孤独感

24節以降の聖書箇所の中での、トマスとイエスとの関わり場面の中で、十二人の弟子の一人であったトマスは、25節にあるように「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」とまで言い放ちます。このような言葉によって、トマスは信仰の弱者、「疑いのトマス」として、後世に名を残してしまうことになるわけです。なるほど、確かにこの強烈的な拒絶は直接的には、キリストの復活など信じないという強い意思を感じますけれども、それと同時に、トマスがここまでの言葉を言うにはもう少し違う動機があったのではないかとも思います。他の弟子たちに復活のイエスが現れた時、トマスはいなかったことに着目するならば、トマスは孤独感を感じていたのではないか。トマスの中には、イエスの復活を喜びたい気持ち、イエスを拒絶したい気持ち、孤独感というものが混在する、トマス自身もよく分からないような感情が渦巻いていたのではないかと思います。

イエスが告げる「平和」

そして、それらの気持ちを全てイエスは知っており、そして言うのです。「あなたがたに平和があるように」。

そのような恐れを抱いている弟子たちの前に復活したイエスが現れます。そして、19節においても26節においても同じ言葉で第一声を発します。「あなたがたに平和があるように」という言葉です。どうでし

ようか。日本語の新共同訳聖書を読んでいて、このイエスの言葉は唐突な感じがしないでしょうか。意味が分からないではないけれども、少し物語の流れが途切れるような感じがしないでしょうか。

この「あなたがたに平和があるように」と訳されている言葉は、新約聖書の原語であるギリシア語を直訳すると「あなたがたに平和」と簡潔に述べられた言い方です。新約聖書はギリシア語で書かれているわけですが、イエスや弟子たちが実際にはアラム語を使って会話していることなどを考え合わせると、ここでは「シャローム」という言葉でイエスは語りかけたのではないかと考えられます。このヘブライ語の「シャローム」は日常の挨拶でも使われる言葉で「平和があるように」という意味ですが、とくにヘブライ語の「平和」とは、神が共にいるということを意味します。神が共におられる時こそが平和だということを意味しています。神が共にいる、こんなに平和で安心なことはないという言葉です。

つまり、イエスは弟子たちに第一声として「神が共にいるよ」と宣言したと言えます。ユダヤ人たちが自分たちを異端として、会堂から追放し、命をも狙っている状況の中で恐れに震える弟子たちに向かってイエスは「恐れることはない。なお神が共にいてくださるよ」と語りかけ、孤独感の中で感情が揺れ動く弟子に向かって「平和があるように」と言い、27節の言葉を言います。イエスはトマスが抱いている思いを充分に知った上で、そのトマスに向き合っただけの言葉は言っている、つまり、「神はあなたを忘れてはいない、神はあなたと共にいる」、まさにそのことを告げたのです。人間が持ち得るさまざまな恐れの中で揺れ動く人間へ、その恐れや感情を全て知っている救い主は「あなたがたに平和」つまり「神はあなたがたと共にいる」と告げているのです。そして、その言葉は今ここで生きている私たちにも変わらず向けられているものなのです。なぜなら、復活したキリストは生き続けているからです。

私たちと共にある神

私たちもまた、この世の旅路を歩むさまざまな状況の中で、さまざまな原因で恐れを抱きます。その最たるものが生命の危機への恐れでしょう。私たちの世界は現在、新型コロナウイルス感染拡大による生命の危機への恐れを抱いています。また新型コロナウイルスによるものに限らず生命に関わる病気の中で、恐れを抱きます。あるいは病気以外の原因によって死を身近に感じる局面があるかも知れません。そのような状況の中にある時、どこにも助けは無いという絶望感や孤独感に陥る弱さを、当然のこととして私たちは持っているのではないのでしょうか。

私たちがそのような恐れの中で絶望感や孤独感に陥る時、救い主はどこにいて、どのように私たちに関わってくださるのか、そのことを今日の聖書箇所は私たちにメッセージを送っています。恐れの中で絶望感や孤独感に陥る弟子たちにそうであったように、現代の状況の中を生きる私たち一人一人に救い主は「平和があるように。」という言葉で絶えずかけてくださいます。「神がいつも共にいる。あなたは一人ではない。」と告げてくださるのです。死を乗り越え復活し、今も生きて共にいる神からの平和を心に刻みながら、他ならぬ神が指し示す道を、神からの希望を与えられながら、この世の旅路を歩んで行きましょう。